

土 沢 地 区

1 芳盛寺の僧空海画像 市

MAP B-4

空海画像は、信仰の対象として数多く流布しており、右手で五鈴杵を持ち左手に数珠を握りながら椅子に座す像容も一般的なものと いえます。

当画像の箱書には「真如親王御筆」となっていますが、真如法親王は平安時代(西暦 800 年代)の人です。画法・絵絹・画像右上方に書かれた賛文の書風などから、室町時代(14 世紀後半ないし 15 世紀前半)の作と思われる。

平塚市内に存在する仏画としては最古の作品であり、もとは高野山に伝わっていたもので、文久 2 年(1862)に芳盛寺の慈鍵に譲られたものであることが、軸裏書や箱書からわかります。



2 土屋の館跡と土屋一族の墓

MAP B-4

平安時代の末、中村ノ庄司宗平の三男、宗遠は土屋に居館を構えました。宗遠は治承 4 年(1180)の源頼朝の挙兵に助力するとともに、源実朝の「金槐和歌集」に登場する人物であると言われています。土屋の大乗院の近くには、土屋一族の墓と言われる五輪塔群があり、地元の人々の手で大切に保存されています。



3 延命寺の木造地藏菩薩半跏像 市

MAP D-4

延命寺の本尊で、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、左足を垂下して蓮台に坐る半跏姿の像です。像底部に墨書があり、文和 2 年(1353)7 月、南北朝時代の造立であることがわかります。

顔立ちは整っており、面部・体軀ともに奥行き深く量感に富み、着衣の皺は正面では簡略化されていますが、側面は写実的に刻出し、背面も丁寧に仕上げられています。この時期の作例によく見られる宋元風の装飾性豊かな衣文表現は見当たらず、県内の中世地藏菩薩像の中でも異彩を放つ作品です。



4 妙覚寺四脚門 県

MAP D-5

四脚門とは本柱筋の前後に各 2 本、計 4 本の控柱を立てたもので、妙覚寺の四脚門は関東大震災前には扉もあり、茅葺で黒く塗られていたため、「黒門」とも呼ばれていました。斗拱や臺段に室町時代末の様式を示しますが、実年代は桃山頃と推定されます。

鎌倉地方の室町末から江戸初期頃の四脚門が宗派を問わず禅宗様であるのに対し、この四脚門は禅宗様を取入っていますが、全体の意匠は軽快な和様の風があり、西相模における室町末から桃山時代の建築様式の一端を伝える貴重な門です。



5 八剎神社の木造不動明王立像 国

MAP D-6

地元では「かんまん不動」あるいは「がんまん不動」の名で呼ばれている、平安時代後期の作風を備えた像です。正面を向いて磐石座に直立し、右手に利剣を、左手に羂索を持っています。頭髪を中央で左右に分け、渦巻状の頭飾を付けています。その表情は不動明王らしく忿怒相で、額にしわを刻み、左目を細めて右目は見開き、口の両端に右上と左下の牙をのそかしていますが、全体的におとなしく温和な感じがする像です。

もとは吉沢北西の不動平にあった不動堂に安置されていたと伝えられています。その後、大光寺(現廃寺)、八剎神社、松岩寺と安置場所が移りましたが、現在は収蔵施設に安置されています。

6 小銅鐸出土地点(内沢遺跡)

MAP D-5

内沢遺跡はめぐみが丘開発の際に発見され、発掘調査で古墳時代前期(4 世紀)を中心に 81 軒もの竪穴住居址が検出されました。集落中央の溝からは、土器片に混じって小銅鐸が出土しました。銅鐸はもともとベルのように音を出す道具ですが、弥生時代はまつりの道具として使われ、一部は巨大化して本来の用途を失います。

この小銅鐸は 10cm 程の小さなもので、文様はありません。2 つの破片に分かれており、まじないのために壊されたものようです。関東地方での小銅鐸の出土例は少なく、弥生時代から古墳時代のまつりの様子を伝える貴重な資料です。



旭 地 区

1 薬王寺の仏像 市

MAP F-5

木造阿彌陀如来及び観音・勢至両菩薩立像 市

阿彌陀如来像は光背と台座が後世の作ですが、着衣には制作当初の切金文や胡粉盛上文様がよく残されています。観音像は両手足や光背など、勢至像は左手や両足先などを欠いていましたが、平成 3 年の修理で復元されました。

阿彌陀如来像の低い頭髪や衣の皺、両脇侍像の結び上げた頭髪と下半身の衣文表現などに宋元風の特徴がみられます。造立年代は室町時代も早い頃と考えられ、平塚市内に遺る中世彫刻の中では、屈指の作として貴重な存在といえます。



2 明王院の木造白衣観音菩薩坐像 市

MAP F-6

明王院

徳龍山延寿寺と号し、旧雷電社(現徳延神社)の別当でした。現在の本堂は、享保年間(1716~1736)に旧寺地より現在地に移転新築したもので、市内でも最古級の建物です。



木造白衣観音菩薩坐像 市

明王院の本尊で、平素は秘仏です。小像ながら面貌には張りがあり、表情もよく引き締まっています。体部はやや猫背の姿勢を示し、肉取りには量感があり、法衣垂下部は左右にバランスよく広がっています。複雑な服制を手際よくまとめ、動きのある衣褶のさばきなどに、作者の高度な彫技がうかがわれます。制作時期は、南北朝から室町時代初期頃(14 世紀末ないし 15 世紀初頭頃)と推定され、市内に遺る宋風のスタイルを引く作例の中においても、本像はその佳作として大変重要な存在です。

なお、現在、尊名を白衣観音としています。『新編相模国風土記稿』では「本尊正観音」と記されており、像の形状は白衣観音ではなく聖観音の特徴がみられます。

3 「旭地名発祥の由来」碑

MAP E-6

旭村は昭和 29 年 7 月に平塚市と合併しました。その後まちは急速に発展し、人口も十倍以上に増えました。平成元年 4 月には自治会連合会が南北に分かれましたが、平成 3 年には旭地区団体連絡協議会が発足し、旭地区が一体となったまちづくりを進めています。

この「旭地名発祥の由来」碑は、平塚市との合併 50 周年を記念し、旭地区のまとまりのシンボルとして、建立されました。



4 鎌倉街道

MAP E-5

鎌倉に幕府が開かれると、鎌倉と地方を結ぶ道が発達しました。これらの道は鎌倉街道あるいは鎌倉往還、鎌倉大縄、鎌倉往縄とも呼ばれました。

南原から公所に至るこの道もその一つでした。『新編相模国風土記稿』には、公所村の条に「東南の間より入る一路を鎌倉往縄と唱ふ」とあり、徳延村の条に「北方村境に波多野道係れり、鎌倉古道なりと云ふ」とあります。



5 鳩雨居士寿碑

MAP E-6

鳩雨は俳号で文化 10 年(1813)生まれ、本名は斎藤通時、字は伯趣と称しました。根坂間村高橋孫左衛門の招きにより同家に寄寓し、安政元年(1854)に私塾「三枝堂」を開きました。

この私塾は明治 5 年頃まで開校していました。子弟は根坂間村を中心に近在 18 か村・3 百余人に及びました。明治 15 年 12 月、鳩雨 70 歳を祝い授業弟子によって「鳩雨居士寿碑」が建碑されました。



6 根坂間横穴群

MAP E-6

7~8 世紀初頭の古墳時代の終わり頃、市内の台地斜面には多数の横穴墓が造られました。根坂間横穴墓群はその一つで、昭和 8 年(1933)林道工事中に 8 基発見され、現在は 5 基が残っています。土器、直刀、玉類が出土し、特に 6 つの鈴の付いた銅鉋は珍しいものです。



7 出縄砦址

MAP E-6

この辺り一帯は、出縄城(手縄城)や出縄砦の跡と伝えられていました。この地で、昭和 60 年(1985)に発掘調査が行われました。その結果、堀切状の溝・方形区画の溝・版築掘方・掘立状遺構などと共に、凝灰岩の大小切石が多数検出されました。

調査の成果から、近世における凝灰岩の細工を主とした石工関連の遺跡と思われるが、中世城郭としての可能性も否定することはできません。公園には発掘調査の際に出土した凝灰岩の切石の一部が置かれています。

8 万田貝殻坂貝塚

MAP E-7

万田貝塚は貝殻坂貝塚とも呼ばれ、縄文時代の土器や石器、骨角器、獣骨、魚骨などが出土しました。縄文土器は地域によって文様などが違うと考えられていたことが、大正 14 年(1925)の発掘調査で、これらは製作年代の違いであることがわかりました。この発見で縄文土器の研究が発展し、万田貝塚は考古学史上に名を残しています。



9 日本山岳界の先駆者 岡野金次郎

MAP E-8

岡野金次郎は明治 7 年(1874)、現在の横浜市で生まれました。明治 35 年(1902)、岡野と小島烏水は日本人登山家として初めて槍ヶ岳へ登頂しました。その翌年、岡野らは自分たちより前に槍ヶ岳に登ったウォルター・ウェストンから、日本にも山岳会をつくることを勧められます。これが日本山岳会の設立につながりました。

昭和 15 年(1940)、平塚に移り住んだ岡野は、昭和 20 年に戦災で平塚を離れますが、昭和 28 年には再び平塚に戻り、亡くなるまで平塚に住み続けました。富士山が好きだった岡野は、散歩に出かけては富士山を眺めていたといわれます。

